



留学のきっかけ

私の留学は、芸術の街パリで美術を学びたい、フランスでの教育を知りたい、といったようなカッコいい目的があったわけではありません。中学生の時の世界史で出会った魅力的なヨーロッパに対する強い憧れがきっかけです。当時から漠然と、いつかこんな街に住んでみたいなあという夢がありました。

高校二年の夏、先輩が進学したことをきっかけに学芸大学の存在を知り、オープンキャンパスに参加しました。そのときに、のちに私が留学することになるフランス、パリの INALCO (東洋言語文化学院) に留学した方の体験記を聞きました。おかしな話ですが、その時の感覚は今でもはっきりと覚えています。フランスで過ごした大学での風景、フランス人との交流、歴史の残る街並みや教科書でしか見ることのなかった建造物が日常にある生活の様子を見て、私がこれまで持っていた憧れの風景はここだ！と直感でわかったのです。

もともと多文化共生教育というものにも興味があった私はその日を境に志望校を変え、必ずこの学科へ来てあの大学へ留学しようと決め、無事に入学することができたのです。

留学への準備

留学が決まって以降は仏検の取得やフランス語ラジオの習慣化などに取り組みました。大学内にいたフランスからの留学生とは積極的に交流を図り、授業でなかなか得られなかった聞く力と話す力をつけることを意識しました。

また、長い時間を過ごす中で周りの人や環境に流されないように、留学中の明確な目標を三つ立てました。まず卒業論文の調査を現地で進めること、必ず何かしらのコミュニティに参加すること、そしてただの留学生にならないことです。当時のわたしの研究テーマはフランスの余暇に焦点を当てたものでした。現地で文献を探し、実際にバカンスの時期に観光地に赴くなどのなどのフィールドワークができればいいなと思っていました。コミュニティに参加することは、大学の授業の他にも定期的に顔を合わせる人が集まる環境に参加することで、友人の輪が広がるのが期待でき、異国の地でも集団行動を行うことはとても意義があることだと思いました。そして最後のただの留学生にならないという目標は、与えられた環境に満足することなく自分から新しい環境へ挑戦することを意味していました。

留学のきっかけが曖昧だからこそ、出発前にしっかりとした軸を自分で設けることは、留学を終えた今でも重要なことだったと感じています。

留学が始まる

最初の数か月は苦勞の連続でした。銀行口座の開設や保険、VISA の手続き、携帯電話の契約や交通機関の定期など、行政的な手続きの連続でした。日本にいた頃に仲良くなった留学生の友達や、二年次のサマースクールでお世話になったホストファミリーに現地で手伝ってもらうことができ、なんとか無事に手続きを終えることができました。

大学での授業が始まると、周りの留学生の語学レベルの高さに驚きました。INALCO は留学生の受け入れが非常に多く、その分授業の質とレベルがとても高い学校です。自分の実力がまだまだだったことに気づかされ、授業についていくのが精一杯でした。それでも留学生向けではなく、学部生向けの授業にも参加しました。聞き取ることも難しい授業は、初めのうちは何について話しているのかさえわからない状態でしたが、授業を録音して復習し、現地の学生に課題を手伝ってもらいながら勉強を続けました。



また、大学内のバレーボールのチームを見つけ、練習に参加し始めました。女子チームには留学生が一人しかいなかったため、チームの中でコミュニケーションをはかることは簡単ではありませんでしたが、とにかく掛け声を出して盛り上げることを心がけて過ごしました。現地でできた友人から学生寮の近くに合った多文化交流カフェにも定期的に通い始め、授業以外での友人の輪は大きく広がりました。

辛いことも楽しいことも

留学生用の授業には半期でだいぶ慣れましたが、学部生用の授業に慣れるのは体力的にも、精神的にもかなりのエネルギーを使いました。興味のある分野を選んで受講していましたが、7枚のレポート提出を求められたときはとても焦りました。日本でもなかなか経験したことがない分量でフランス語、、、ととても不安になったのを今でも覚えています。とりあえず自分の力で7枚書いてみることから始めましたが、結論まで導き出すのにとても時間がかかりました。友人の力を借りて、レポートで使いやすい言葉や文章の構成、なんでこう思ったのかを掘り下げて書くことなどを1対1で時間をかけて教えてもらい、なんとか完成させることができました。そのレポートのおかげか、その授業ではとてもいい成績をもらうことができました。

バレーボールチームでは一週間に一度、他大学との練習試合に出場しました。勝ちを目指すチームではミーティングなどの話し合いも重要になります。自分の意見がないとつまらない人と思われてしまいがちなフランスでは、話し合いの場でしっかりと自己主張することが必要ですが、留学当初は今のこの気持ちを表す言葉を知らない、何について話し合っているのかわからない、といったことも頻繁にあり、何度も悔しい思いをしました。伝えたいのにそれができない、という状況はとてももどかしく苦しいものでした。

それでも練習以外の時間をチームメンバーと過ごし、落ち着いた環境で自分の意見を伝える努力をしたり、普段の自分の考え方を共有したりすることで、チームメンバーとの連携も取りやすくなりました。練習もより一層楽しくなり、試合でも存在感を出すことができるようになりました。メンバーとは一緒にパリのラーメンを食べに行ったり、スキー旅行に行ったりと、留学中の多くの時間を共に過ごしました。





多文化交流カフェで知り合った人々とも定期的に会うようになりました。年配の方が多くこともあり、歴史や政治に詳しい人も多く、私が興味を持っていた卒論のテーマ以上に興味のあるフランス国内の問題が見えてくるのはとても興味深いことでした。彼らとの交流をきっかけに卒論のテーマを変更し、新しい問題点について勉強を始めました。一緒に文献を探してもらい、読んで要約、そして添削、というのを繰り返しました。定期的に会うことは、前回話した内容を膨らませたり、新しいトピックを探したりすることに繋がり、そのための語彙も知ることになるのはとても良い習慣だったと思います。また難しい文献を読む機会が得られたこと、その問題に関する知識を教えてもらえることはとてもありがたいことでした。

留学を終えて

留学を終えた今思うことは、出発前にたてた目標が一年ブレずに生きていたな、ということです。

卒業論文の調査は完璧には終えられませんでした。新しいテーマを見つけることができ、定期的に文献を読み続けることができました。バレーボールチームやカフェでのコミュニティは、帰国直前まで私にとってかけがえのない存在となり、彼らとの交流が新しく刺激的な環境を与えてくれました。留学生の輪に甘えることなく、自分から難しい授業を選び、日本人のいないチームに飛び込み、複雑な文献にも挑戦したことは全て、ただの留学生にはならない、と常に心に誓っていたことが影響していると思います。つらいこともたくさんありましたが、1年間で経験したことは全て今の自分のエネルギーになっていると感じています。

留学生にとって過ごしやすく、ただ生活するだけでも十分成長できる環境を与えてくれる INALCO では、どれだけその環境に満足せず、自分から一步踏み出した行動を取れるかがとても重要です。苦しいこともたくさんありますが、自分が逃げずに努力した結果は時間がかかっても必ずついてきます。

これから挑戦する皆さんにとっての留学が、素敵な財産になることを陰ながら応援しています。